町長ひとりごと ⑨⓪

斉藤 譲

獣魂祭

食肉センターでは、と殺された家畜の供養をするため、毎年獣魂祭を行っている。敷地の角に建つ獣魂碑の前に簡単な祭壇をつくり、この施設の関係者が相集い、読経をあげ、焼香をして懇に弔魂の法要を営むのである。およそ生きとし生けるものには魂が宿り、いったん生を受けたものは、天命を全うするのが本来の姿である。たとえ家畜とはいえその生を断たれ、人間の食肉に供されるその宿命を思えば、あまりにも哀れであり、不憫である。搬入されてくる牛や豚の姿を見る度に、心が痛むのを禁じ得ない。だから、この獣魂祭を行う度に私は、心の底から〝すまない〟〝ありがとう〟と感謝の念をこめて手を合わせる。まして、それが仕事とはいえ年中と殺や解体作業に従事している関係者にとっては、なお一層深い思い入れがあるに違いない。

この獣魂祭は、例年五月青葉の薫る時期に行われるのであるが、今年は都合で六月上旬の日曜日となった。汗ばむような初夏の陽射しを浴び、読経を聞きながら、私はと畜場をめぐるいろいろなことに思いを馳せた。

▼そもそもこの食肉センターの創業は、明治四三年の東陽村営から始まり、光町がこれを継承してきたもので、今年で八四年の歴史を刻む。

現在県下には十二カ所のと畜場があり、年間約八〇万頭のと畜を行っている。この中、最もと畜頭数の多いのは、旭市他三町の組合立で経営する東総食肉センターで、約二二万頭、次いで当食肉センターが、約一六万頭となっている。と畜場の経営主体は、当町のような公営もあれば、経済連系統、あるいは株式会社など様々である。

実は、いまどこの施設もきびしい経営の瀬戸際に立たされている。その主な原因は、畜産物の自由化によって廉価な輸入肉が急増し、国内産の価格が長期にわたって低迷を続け、更に生産する環境問題も加わって、国内の生産頭数が年々大幅に減少してきているためである。つい数年前まで県下の年間と畜頭数は、百万頭を維持していたのが、その後減少の一途をたどり、今日では八〇万頭を割り込む状況となっている。これは当町のセンターに於ても例外ではなく、数年前は年間二〇万頭を上廻っていたのが、その後連年落込みを続け、現在では一六万頭にまで下ってきており、減少率は小幅になってきているとはいえ、依然減少傾向には歯止めがかかっていない。

▲6月5日、関係者が集り行われた獣魂祭

▼こんな状況の中で、生産者は勿論のこと、問屋も運搬業も、そしてと畜作業をする処理士組合もみんな苦境に喘いでいる。低価格に頭数の減少が追い打ちをかける状態は、まさに構造的な問題であり、残念ながら今後この状況は一層きびしくなるというのが一般的な見方である。食肉センターの経営も年々厳しくなってきている。更にこれに加えてフロンガスの製造禁止に伴なう冷蔵庫の大規模改修問題が真近に迫り、他の施設の老朽化もジワジワ進行するといった難題も横たわっているのである。ともあれ、こんな厳しく切ない経営環境の中で生産者も、業界も歯をくいしばって頑張っているのであるから、町としてもこの食肉センターの持つ社会的使命、責任のうえにたって、何としても維持発展させていかなければならないと考えている。

▼食肉センターは、毎年町の一般会計に三千万円の繰出金を出している。この金は、町の各種の事業に充られているのであるが、この中の百万円は、児童・生徒の給食に良質な肉を使用するために使っている。このようなことは、多分全国でも稀なことだと思う。

光町は税収の乏しい町であり、国からの地方交付税に財源の大宗を依存している。その地方交付税は、例えば税収が一億円増えると、交付額は逆に約七千五百万円減額される仕組みになっている。つまり、地方交付税を受けている団体は、税収が伸びても、実質的な実入りはその約二五パーセントだ、ということである。しかし、この三千万円の繰出金は、地方交付税算定の対象外であるから、全額実入りとなる。だからこれは一億二千万円の税収に匹敵する。町税の総額が一〇億円を若干下廻る状況を考えれば、この繰出金がいかに価値あるものであるかは自から明らかであろう。

他とは比較にならない厳しい作業現場の中で、業界の皆さんが苦闘しながら生み出してくれるこの貴重な財源を、決して軽く扱ってはならないと私は肝に銘じている。

食卓に上る一片の肉にも、様々な思いや苦労が詰っている。感謝の念なくしては、とてもいただくことはできない。